



くらしかた・すまいかた

Vol.28

## 連の家

日々の暮らしから「生きる」を見つめる

神奈川県相模原市藤野にある連の家は、「循環」をテーマとして設計された住宅です。今回は小さな畑と食卓、それを囲む家族の間で日々で繰り返される命の循環について、お話を伺いました。

取材・編集：(株)地球工作所 Earth Planning & Work.inc  
取材協力：小泉美智子さん

### シュタイナー教育に魅せられて

編集部：この家に暮らすようになったきっかけを教えてください。  
小泉さん：私たちは、以前は荒川区町谷に住んでいました。今はまったく違う環境で、川のそばの15階建のマンションの最上階に住んでいたため、視界を遮るものがなく、色々な花火大会を自宅から見ることができました。そこには10年くらい暮らしていたと思います。大きな公園が2つあって、子育てには良い場所だと思って暮らしていました。

編集部：どうして藤野に住まいを移されたのでしょうか。

小泉さん：藤野にあるシュタイナー学園に子どもを通わせたいというのが大きな動機ですね。私の娘は生まれたときから重篤な食物アレルギー疾患を持っていて、実はそのアレルギーのことがなければ娘を保育園か幼稚園に通わせながら私も仕事に復帰するつもりだったのですが、園での誤食事故が多いことを知って、小学生になるまでは自主保育で過ごしていたんです。わが子の命は自分で守ろうと。

自主保育をされているお母さんたちは自然志向の人が多くて、その中でシュタイナー学園のことを知り、その授業内容に惹かれました。それでシュタイナー幼稚園の土曜クラスに娘を通わせてみて、ますます好きになりました。

娘が入学する前に、藤野のシュタイナー学園のオープンデイと荒川区公立小学校の授業参観に行きました。比較の結果、娘は藤野のシュタイナー学園に通わせたいと強く思うようになりました。

編集部：ご家族で移住することを決められたんですか。

小泉さん：そうですね。まず夫にシュタイナーに興味を持ってもらえるようにパンフレットとか色々な情報を家の中に置いてみて、「大人向けの体験授業があるみたい。」という情報を渡したら、実際に参加することになり、その体験授業に夫が感激して、「藤野に引っ越そうか。」という流れになりました。

編集部：作戦成功ですね。

小泉さん：成功してよかったです（笑）。それで最初は中古の建売住宅を購入して、リフォームして住むつもりで物件を探していました。ここにしよう！契約しましょう！というところまで進んでいたのですが、契約の3日前に別の人に即金で購入されてしまったため、引越先となるはずの家がなくなってしまいました。

編集部：大変でしたね。

小泉さん：この家を建てることにつながったので結果的に良かったのですが、住む場所が急に無くなった当時は困ってしまいました。

### 連の家との出会い

編集部：中古物件を購入する話が流れた後、どうされたんですか。

小泉さん：同じ不動産屋さんで、「連の家プロジェクト」のことを知りました。私たちが見に来た時は更地でしたが、夫がひと見してこの土地を気に入ってしまって、すぐに購入を決めました。「平屋プロジェクト」というキャッチコピーが書かれた看板が立っ



ていたんですが、そのプロジェクトの第1号となった我が家が色々とわがままを言って2階建てにしてもらったので、そのあと「っぼい」という文字が看板に足されて、「平屋っぼいプロジェクト」と修正されていました(笑)。

編集部：注文住宅ということは完成するまでに時間がかかったと思うのですが。

小泉さん：契約から1年かかりました。その間に学校が始まってしまったので、駅前の小さなコーポを借りて暮らしていました。移住してから家が完成するまでの10ヶ月間、娘をお迎えに行っは建設途中の現場に立ち寄りました。土台づくりから内装まで、多くの人の手を借りて家が徐々に形になってゆく様子を、最初から最後まで見ることが出来たのは、娘にも私にもかけがえのない経験になりました。

シュタイナー学園には、家づくりの授業があるんですよ。小学校3年生から4年生にかけてのプログラムで、毎年、クラスごとに計画を立てます。娘のクラスは杉と土壁の家に決まり、柱となる杉の木を山に伐りに行きました。倒した木を皆で運び、校庭に持ち込んで木の皮を剥ぎ、柿渋を塗り、穴を掘って立て、柱の間に細い竹を組んで練った土を塗って土壁を作り、屋根は杉の葉っぱで葺き、和風の涼しい家が完成しました。

編集部：材を山から切り出すところからはじめる、というのがすごいですね。

小泉さん：そうですね。子ども達は授業の中でお米づくりも体験するのですが、モミを消毒して苗を作るところから始めて、苗を育てて田植えをし、雑草を抜くなどの夏の管理も行い、秋まで育

てて稲刈りをします。収穫した稲穂を脱穀、精米したら、自分たちで新米を炊いておにぎりを作り、学内に振舞います。残りのお米は学内で販売します。お米の計量や計算は、算数の授業の一部です。何キロを何合ずつに分けると袋がいくつできて、いくつ販売したのか、自分たちで計算するところまで、一貫して行きます。

編集部：1つのテーマを一貫して学べるのはすごいですね。

小泉さん：シュタイナー教育の素晴らしいところは、そういう人の生き様を通して、子ども達の学びが実践されていることです。私の娘も毎日帰ってきては、その日自分が体験したことや学んだことをたくさん話してくれます。その時の娘が本当に楽しそうで、「学ぶことって、本来こうあるべきなんだよな。」としみじみ感じています。

### 畑と食卓を循環させる

小泉さん：この「連の家」は「循環」をテーマに設計された家です。創和建设株式会社と、建築士の山田貴宏さん(ビオフォルム環境デザイン室)、庭師の矢田陽介さん(ボタニカン)のチームで、庭で栽培した野菜や果物取れたものをダイレクトにキッチンに持ち込める「食べられる庭」というコンセプトに基づき、畑との出入りや農作業がしやすいように設計していただきました。その後、食べた後の排泄物を堆肥化して畑に戻すことはできないかと考えていたときに、出逢ったのが、液肥製造装置「あ・うんユニット」です。

編集部：自分たちの排泄物を堆肥化するトイレですか。

小泉さん：そうです。微生物と発酵の力を利用して液肥化す

る、という国産の製品をインターネットで見つけて購入し、自分で施工したんですよ。

編集部：自分で施工できるものなんですか？

小泉さん：大変でしたけど、なんとかやりました。大型のタンクを二つ埋設するために、深さ2mの穴を掘ったり、液肥を畑まで回すためのパイプを埋設をしたりしました。

編集部：どんな仕組みか、簡単に教えていただけますか。

小泉さん：「複合発酵」という仕組みで、水と菌床を入れたタンクを二つ使います(以下、A槽、B槽)。排泄物はまずA槽に入り、そこですぐに好気性の発酵微生物の働きによって、有機物質の処理が始まります。タンクの中にはブローで常に空気が送り込まれており、水や菌床と混ざり約20時間攪拌され液化した排泄物からは、悪臭が発生することはありません。夜中に数時間ブローを止めると、菌床が沈殿して上澄みは酵素水だけになる「固液分離」という現象が起きます。この酵素水をB槽に移し、今度は排泄物に含まれる無機物を嫌気発酵によって約20時間攪拌します。A槽と同様にブローを数時間停止して菌床が沈殿すると、上澄みは「複合発酵合成酵素水」と呼ばれる液体になります。これを液肥として畑の土に浸透させると、土中の微生物が活性化して、肥料や農薬に頼らない耕作が可能になるという仕組みです。

編集部：すごいですね。

小泉さん：このトイレは発酵微生物の働きによって、排泄物を変化させているので、販売元からは、「一日一回、菌に声をかけてください。菌の働きが違います。」と言われていたんですが、買った当初は冬の寒さに負けて毎日の声掛けができないこともありました。すると、うっすら不快な臭いがしてくるのです。慌てて声をかけるようにしたら、異臭はおさまりました。科学では証明できず信じが

たいことではありませんが、異臭は困るので一日一回は見に行って声をかけることにしています。

編集部：菌も生きている、ということなのでしょう。

小泉さん：まさにそうだと思います。植物もそうですが、自分の気持ちをちゃんと向けてあげるだけで、活性化するようです。それ以来、パンや発酵食品をつくる時にも、菌に声をかけるようにしています。「おいしくなってね。」とか、簡単な言葉でいいんです。これはぜひ試して、たくさんの人に実感して欲しいことですね。

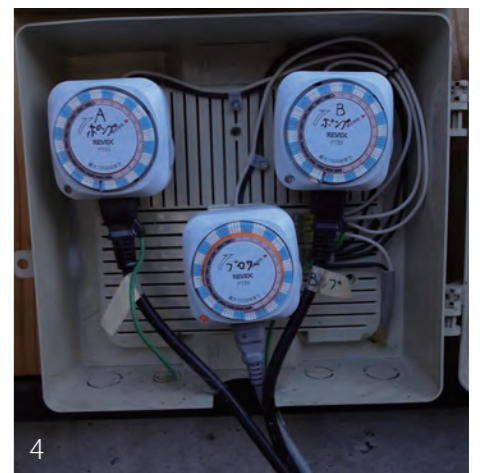
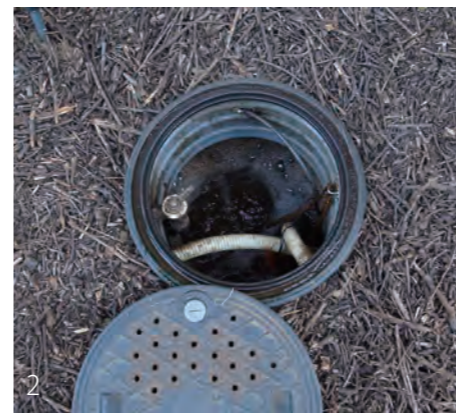
### 藤野暮らしから見えたこと

編集部：藤野で暮らし始めて、今までの暮らしと違ったことはありませんか。

小泉さん：以前暮らしていた荒川では、公民館の掲示板やママ友達のネットワークしか地域の方法を得る方法がなく、情報の在り処がわかりづらかったのですが、藤野では自分がしたいこと、欲しいことがあったら口に出すと、自然と自分が求めている情報に会えるんです。それは今までではなかった生活ですね。

例えば、うちは薪ストーブを使っていますが、薪をお店で買うと1m<sup>3</sup>で2万円位します。薪は燃料としては高価なものです。ただ藤野では、梅林やゴルフ場、庭木の管理で出た間伐材についての情報も回ってくるので、口コミで教えてもらったところにもらいに行ったりして賄っています。

口コミで必要な情報やものが手に入る根底には、助け合いとかお互い様という気持ちとともに、相互理解があります。私の趣味嗜好を理解したうえで求める情報を持ってきてくれるので、アナログですが精度が高く信頼できます。



1. あ・うんシステムをトイレの床から見る。排泄物は管を通して、すぐに発酵性微生物のいるA槽に送られる。
2. 家の外側にあるA槽の中。分解は進み、ほとんど匂いはない。
3. マンホールの下には、分解用タンクが埋まっている。
4. 攪拌はタイマーによってコントロールされている。



食で言うと、夏は庭の菜園の収穫量が多いので、野菜はほとんど買いません。自分たちで育てたものを自分たちで料理し、食べる。この家のテーマであった「循環」を、日々の暮らしの中で実現できていると思います。

編集部：素晴らしいですね。

小泉さん：冬になるとまた違ってきます。藤野はとても寒い地域で、12月から3月まで霜柱が12cmもできるような場所です。そのため冬は農閑期になります。もちろん我が家の菜園も冬は作物を育てることができません。その分、太陽の力を活かして暮らしています。洗った土鍋を日向に干したり、駐車場の屋根に太陽熱温水器を乗せて、太陽熱でお湯を作ったりしています。朝の気温がマイナス9度くらいの日でも、お日様さえ出れば60度くらいのお湯が作れます。給湯にかかるエネルギーを太陽で賄えるのは、とても気持ちがいいものです。

編集部：自然の恵みを活かして暮らしている感じですね。

小泉さん：そうですね。家の窓から山並みが見えて、その向こうに日が昇ったり、沈んでいくまでの陰りを見たり、山の木々の色が変わっていく様を見たり。家の中から空と山が見えることも、ここに家を建てようと思った理由の1つです。自然の移ろいを感じながら暮らしているのが、毎日満たされた気持ちです。

私は地方の出身ではあるのですが、ここまで自然に囲まれて生活することがなかったので、最初は戸惑いました。

家の窓をキジが叩くこともありますし、山鳩やヤマネが来たり、

庭で死んでいるのを見つけたりしたこともあります。

編集部：それは驚きますね。

小泉さん：でもそういった経験を通して、命というのは、生き物の生き死にも含めて一つのものなんだと思うようになりました。あとは、トイレの設置を自分でやった後に、大作業が楽しくなり、家の中の棚や作業台、庭のコンポストや道具入れ等も自分で作りました。

以前は大型の工具を扱ったことはありませんでしたが、ここで丸鋸や電動チェーンソーなどを購入し、自分でも使えるようになりました。これも意外な発見ですが、藤野で暮らすようになって、自分の手で作れるものが増えました。

日の出とともに起き、自分が育てた果物や野菜のもぎたてを頂く。調味料、保存食、石けん、洗剤、化粧品など、作れるものは自分で作り、足りないものはなるべく友だちが作ってくれたものと交換して暮らす。そうこうするうちに五感も敏感になってきたのか、雨が降る前に洗濯ものを取り込めるようになり、身体の不調も早め手当できるようになりました。都会の暮らしで疲れ切っていた身体が、徐々に、自然と調和することを思い出しつつあるのかなと感じます。日々、細々とすることはありますが、心の奥のほうでゆったりしていると実感しています。それは自分の命を大切にしながら暮らすことにつながる、ここに越えてきて初めて知った感覚です。藤野に引越して、いまの家で暮らせて、本当に幸せだと感じています。

編集部：今日は貴重なお話をありがとうございました。(終)



5. 薪ストーブを置き火にして、アルミホイルなどで巻いた芋を入れて放置しておく、美味しい焼き芋ができる。「どんな芋でも美味しくなります。」と小泉さん。6. キッチンの棚類も全て手作り。7. シュタイナー学校の授業で使う楽器「ライアー」。市販品もあるが、娘さんと自分が使うものは全て手彫りした。8. 庭から山を望む。9. 業務用のウスキー用の樽を購入し、手押しポンプを付けてつくった雨水貯留タンク。雨水は屋根で集水する。10. 庭には明確な境界を持たずに、ハーブや果実、野菜が混植されている。11. 発芽を待つ種たち。12. 連の家内部。中央は吹き抜けで、左右の2階部分を渡り廊下で繋いでいる。13. ラズベリー。14. シロヤマブキ。15. 木陰で雨宿りするナミアゲハ。16. 栗の実。ハーブ類も多く植えられている。17. 自宅周辺で収穫した、カリンや柚子などの果実。18. 果実は加工して長く楽しむ。19. 菜園や食卓で出た枯れ葉や野菜クズを入れて堆肥化するためのコンポストも、小泉さんの手作り。「生ゴミは一度、密封容器に入れて発酵を促進してからコンポストに入れると分解が早いです。」21. 軒下には薪ストーブの焚き付け用として、小枝がたくさんストックされている。有機物がゴミとして捨てられることはほとんどない。形を変えて暮らしの中で循環している。

